

学会で活躍された方々の横顔

————— 亡くなられた先輩方を偲んで —————

日本国際地図学会創立当初から、直接・間接この学会で活躍された、今は亡き元会員の横顔を偲ぶ意味で、この欄を設け今回は 11 人の方々を選び最も身近な方に執筆していただきました。文中には先輩方の知られていない反面や、またご本人以外の多くの方々のお名前や逸話などが出てきます。

このような方々の支えがあったればこそ現在のような充実した学会に発展したことを忘れることはできないと思います。

秋岡武次郎先生を想う

秋岡武次郎先生に初めてお目にかかったのは、法政大学の授業の教室であった。その時は著名な先生の授業が受けられるというだけで、恐縮してただけで、やがて指導教官として細かいことまで御面倒をお掛けすることになるうとは、思ってもみなかった。

当時地理学科の同級生は 10 数名であり、教授陣は非常勤の先生を含めて 16 名もいらっしやった。その中で今も地図用語などの分野で御活躍の大久保武彦先生、今は亡き地図投影の北田宏蔵先生、地理調査所では地図部長で活躍された渡辺 光先生、同じく地理調査所時代は印刷部長であった岡山俊雄先生、いずれも地図のプロ中のプロであるばかりでなく、地理学界の大御所が揃って居られ、当時法政は地図学の学べる唯一と言ってよい大学であった。同期の者たちの地図に対する理解・関心は多少なりとも他の世代より今も高い。

秋岡先生に師事してから、今も御高齢ながら悠々自適の南波松太郎先生に度々お目にかかれるようになった。南波先生は造船が御専門だが秋岡先生とは竹馬の友で、秋岡先生の勧めと御自身の趣味があいまって多くの古地図を蒐集されており、貴重な地図の多くを、秋岡家に泊る傍らご持参され、脇から拝見することができた。(三好唯義氏の「タロウとジロウの古地図コレクション」の髓想が地図ニュース 1989-9 にある) これらの古地図は、神戸市立博物館に寄贈されている。お二人とも私財の大部分を、地図や歴史的な測量機器の収集に投入された。それでなければこれだけの良質の地図資料の集積は無かった。日本中の古書店は先ずこの二人の処に持込んでいた。かつて古地図の収集家の岩田豊樹氏は、性の良い地図はみんな二人の処に行ってしまうと、嘆いたことがあった。岩田氏もまた生活費まで古地図に注ぎ込む地図に魅せられた人であった。

また多くの学問を志す人々が秋岡家の門を叩いた。高木菊三郎氏もその一人で、先生の表札は高木氏の揮毫によるものであった。

先生はよくこんな冗談をされていた。「ぼくは地理学科で一番だったし、一番びりだった。」というのは、大正 8 年東京大学に初めて地理学科が置かれ、地質学科から転科されたただ一人の学生だったからで、当然ながら第 1 回の卒業生は先生一人であったからである。

卒業後日本大学、法政大学の地理学科を創るかたわら陸軍士官学校で地学(Geography)を教授された。士官学校での教頭という教歴が第二次大戦後公職追放を受ける理由になってしまわれた。戦後の御無理で眼疾を患われ、常に奥様が付き添われていた。目を患われてからも学術的な意欲は全く失われず、専用の原稿用紙に先生の口述を奥様が筆記され、推敲に推敲を重ねられ、御自分の納得のいく原

稿にされた。因みに原稿用紙は良質の模造紙を原稿用紙大に裁断したもので、奥様も書いては読んで消すという御苦勞は大変なものであったと拝察していた。これが「日本地図史」（昭和 30 年）を始めとする諸論文集となった。

定年後は自宅の書齋で研究三昧の毎日を送っておられたが、昭和 50（1975）年 2 月 6 日 80 才を一期に大往生された。

先生の没後、膨大な蔵書は文化財としての価値も高く、収集地図は思想的な一貫性があり、再びこれだけのものを集めるのは不可能である。そこで、先生の陸士時代の教え子の山縣有光氏と、先生の東京大学での後輩で、陸士時代の教官仲間の渡辺 光先生が、地図の保存先について心をくだかれ、一括保存の下約束ができるまでいったが、諸事情から不首尾となり、時の氏神とか保柳睦美先生の口添えで文部省（現在は国立歴史民俗博物館に入ることになり、一部は後に神戸博物館に入った。神戸博物館に入った地図は、南波先生が寄贈された地図と共にいつでも閲覧が可能になっている。

秋岡先生は、従来から西高東低な地図学史、発見探検史の分野での貴重な東方での先達であられた。
(清水靖夫)

井阪篤子女史のことども

〔女史の略歴〕井阪^{あつ}篤子女史は、明治 37（1904）年 7 月に井阪家の長女として、当時の山田町（現在の伊勢市）で出生。山田高等女学校を経て奈良女子高等師範学校文科に入学、地理を専攻（同級生は 5 名とか）、大正 14（1925）年卒業、「修身」「教育学」等を含む文科系すべての科目の中等教員免許状を取得、直ちに出身校へ教諭として赴任（当時の制度）。芳紀 21 才。同校の各学年の「地理」の全授業を昭和 19（1944）年まで担当、地理教育に専念。退職後、家にあつて父母の孝養に努める。昭和 34（1959）年の日本地理学会の行事への参加を契機に、地図学を中心とする地理学の研究再開を決意。昭和 55（1980）年の国際地理学会（IGU）と国際地図学協会（ICA）との東京大会の際に発表された論文が研究生生活の締括りとなる。この間、日本国際地図学会の創立とともに会員になられ、その発展に努力され、評議員も勤められ、地図学用語辞典の編集に際しては部会員として、多年の教育実践に基く意見を開陳された。また、筆者の海外留学を期に、筆者が担当している法政大学文学部地理学科の通信課程の「地図学」（専門科目）の通信による指導・単位取得試験について、講師として勤務され、病が重くなるまで続いた。

旧制度では、旧制高等学校（旧制中学校第 4 学年修了を入学資格とし 3 年制）は男子のみ、従ってその卒業生を受け入れる国立大学（3 年制、医学部は 4 年制）は、女子は入学できないのが原則であったから、女子高等師範学校（男子の高等師範学校と同じく 4 年制、一般の高等専門学校よりも 1 年長い。）は、当時としては女子の最高学府であった。高師（東京と広島）・女高師（東京と奈良）の入学者の大部分は、各府県の師範学校を卒業し、小学校での教員実務を経た者であるのに対し、女史は 4 年制高女を卒業後直ちに入学したので最も若くして教諭となった。

教諭として勤務の初め頃、現職講師に資格付与の教育学の講習を命ぜられた。自転車で追い越して行く年輩者の声を耳にすると、「どんな人かと思ったら、まだ小娘じゃないか。」これは女史から聞いた話である。

〔女史の地理地図教育〕当時は社会科の科目はなく、地歴と俗称されることはあつても、「地理」は独立科目で、現在は「地学」に含まれている天文学・地球物理学・気象学等も「地理」の教科の一部であり、日本地理・世界地理と併せて「地理通論」の科目がおかれていた。

女史の地理教育の方針は、昭和1桁の当時としては驚異の一言につきる。毎日定時に、当番の生徒2名が気象要素を観測記録するために、授業を一時退席することを学校当局に認めさせたり、地球儀20個を常備して、40人クラスの授業に活用したり、列車時刻表を各人に配布して旅行計画を立案させるなどはその例である。修学旅行の日程に焼津魚市場見学を入れたり、都市計画、農村計画をカリキュラムに加えるなどしたので、当時、女史の教育を受けた卒業生は、現在の地理教育を見聞きしても、井阪先生に習ったことばかりだと誇らしく語るといふ。

〔女史の研究〕女史の地図を用いた研究の一つは、「熊野鯖」の輸送経路の研究である。紀州海岸産の鯖を、奈良盆地南部（桜井付近）の人は今日でも珍重するが、紀伊国北東隅の錦（三重県紀勢町管内）から、宮川と櫛田川との上流部を、高見峠（高見山1249mの南側）で主稜線を越える経路、塩の移入路についての研究の名著にも記載されていないこの経路を、「聞きこみ」を基礎に、地図による地形解説や経路断面の作成等によって再現し、休泊地や走行時刻までも推定された。

国際地理学会で発表の「伊勢おしろい」の論文は、女史の絶筆となったものだが、櫛田川を通じて、水銀を含む「赤土」の産地であり、おしろい工業が行われたその北岸の射和（現在は松阪市域）と、もう一つの原料の産地である櫛田川デルタの黒田の塩田とが結ばれ、射和と相可（南岸）との渡河地点を通じて、山田（伊勢市）と京とが結ばれるなどの立地条件、背後にある伊勢神宮の力（その布教を含めて）など地図を基礎とする考察が行われる。持統天皇（女帝）が嘉納されたという「おしろい」は、同じく水銀製剤であるが猛毒である昇汞 $HgCl_2$ とは異なり、皮膚収斂剤である甘汞 Hg_2Cl_2 であり、水銀を含む赤土と塩との混合物を乾留して得られる。工場の施設は極めて簡素であるが、製品は同じ重量の金とほぼ等価で取引されたといふ。

〔神宮と女史〕女史の父、勇次郎氏は独学の電気技師で神宮の電気設備を担当し、明治の当時としては異例な地中配線を行い、神宮専用の予備水力発電所まで設置したといふ。山田（駅）・宇治（内宮）・二見を三稜形で結ぶ電車（電気軌道、現在は廃止）も同代の建設である。井阪家は江戸時代からの旧家で、以前は質屋を営み、御師（神宮所属の先達）が必要な時には、数十人分の宿泊食事に必要な家具一切を即座に用立てる程の資産家であり、このことから神宮との結びつきは深かったのであろう。

女史の一家と神宮との結びつきは、女史の教え子がこの区域に居住することと相まって、神宮と神三郡の地域研究に多大の利便があたえられた。筆者も、その利便を受けた一人で、ここでは詳細に述べることはしないが、齋宮（齋王〈女性〉）の居所を兼ねる齋宮寮（臨時の行政機関）に付属する氷室（氷の製造貯蔵所）の研究は、その一つである。〔神宮支配の度合・多気・飯野（当時）の地を「神三郡」といふ。〕

〔出会いと別れ〕女史との出会いは、昭和34年の地理学会（福島大学）の巡検のバス旅行で隣席を占め、裏盤梯への峠道をのぼりつめたあたりで阿武隈準平原の上にモナドノック（残丘）として浮かぶような大滝根山（1193m）をながめ、その情景を女史に伝えた時といえる。

その後間もなく日ソ友好の女性使節団の一員として、ソ連政府の招待により、瀬戸内晴美氏などと共にモスクワ・レニングラードその他を訪問された。9才年下の筆者の指導を受けることになってからは、早稲田大学の個人助手（早大にはこの制度がある。）の資格で、研究室その他の施設を利用して地図学の研究をされ、地学の巡検等にも参加され、同行の学生にも多くの示唆をあたえられた。

昭和55（1980）年の国際学会での発表の後に病に取り付かれ、東京での入院生活の後に生家に戻られ、入退院と自宅療養を繰返えされ、平成2（1990）年9月、自宅において老衰によりねむるが如く他界。享年満86才。三重大学（津）での地理学会（昭和61〈1986〉年）の折に、自宅の病床でお会いしたのが永遠のお別れとなった。もっともとお聞きしておきたいこともあったのに、今となっては叶わぬことである。ご冥福を祈る。

（大久保武彦）

まじめ人間乾さん

乾さんに初めてお目にかかったのは、私がシベリアから復員して、地理調査所に入って間もない昭和 24 年頃のことであった。当時の公務員の給与は、民間よりも低く押えられ生活にも事を欠く有様で、イデオロギーなど考える以前の、正に生きるための労働組合の活動が盛り上っていた。乾さんはその先頭に立って、皆のために夜を徹して当局と地道に交渉されていたことが印象的であった。乾さんとはそれ以来のお付き合いであるが、昭和 35 年 6 月乾さんが地図部の製図課長補佐になられ、私が同じ課の係長で直属の上下関係になってからは、とくに密度の高いお付き合いというよりは公私にわたるご指導を頂いた。

伺ったところによると、乾さんの出は、九州の対馬宗家の弓の指南番をやっておられた家柄で、代々裕福な家庭であったのが確かお父さんの時代に没落し、その後は一家共ども大変苦労されたそうである。このような生い立ちの乾さんを一口で申し上げるならば、非常に“まじめ”な方と私は思っている。仕事、勉強はもとより、人との付き合い、人生の相談役などなど本当に真心で対処される方であった。従って、同僚（会員の金澤 敬さん、塚田建次郎さん、富沢 章さん等）はもとより先輩や上司からの信用は絶大であり、部下からも大変慕われその人望は計り知れないものがある。また、当時は御法度であった男女交際の中にあつて、熱烈な恋愛で結ばれた奥様もよくできた方で、この乾さんの総てをバックアップされ、すばらしいご夫婦であられた。お二人での仲人は実に 20 数組にも及び、このことからそのお人柄を偲ぶことができよう。

一方、酒やタバコともまじめに付合われた方で、とくに好まれた酒にまつわるエピソードは事を欠かない。“酒は飲めば飲むほど旨くなる”といわれ徳利—乾さんの場合銚子というよりも徳利といった方が何となく似合う—を持った右手の薬指を器用に立てて、その指先きをなめながら人に酒を勧める仕草は型になっていた。白楽天の詩“君に一盃を勧む、君辞する莫れ……心中は酔時、醒時より勝るを”ってな感じで飲んでおられたのかも知れない。そして酔う程に唄われる歌のレパートリーは広く、新しい（当時は）ところでは“悲しい酒”、“わたしの城下町”、また“人生の並木道”を唄われるときは、戦死された弟さんの事を思い出されるらしく時として涙ぐまれることもあった。しかし、なんといっても乾さんの歌は真面目を地でいった「やると思えばどこまでやるさ……」の“人生劇場”であり唄の最後に「……ざまあ一見ろ……」が付くのであった。さらに興がのれば唄われる“槍はさびても”、“一槍はさびても名はさびぬ昔忘れぬ落し差し—の端唄は天下一品であった。

さて、乾さんの学会での活動であるが、もちろん「大正 6 年式地形図図式の意義」や「地図の重要な一つの事項「総描」の予察」など立派なご発表もあるが、今から 30 年前の学会発足当時の準備や学会員集めのための行動は大変なものであった。はでさは微塵もないが乾さんのお人柄とその説得力によって加入された人が少なくなかった筈である。

乾さんは積極的に表に出られる方ではないが、第 5 期から第 8 期まで連続して 8 年間、評議員に選出され我われをリードされた。また、1980 年東京で開かれた第 10 回国際地図学会議のときは、その主催機関である「日本地図センター」に在籍されていたが、地図学会議に併催された「国際技術展」の責任者になられ、内外の関係者・関係団体等との交渉から指示、細部にわたる処理など、私的時間もなげうってのご活躍は記憶に新しい。

周知のとおり毎年の大会・総会など大きな学会行事の時の毛筆による書きものは、その殆どのものが乾さんの筆によるものである。大きな用紙に書かれた“次第”あるいは演壇わきの発表題目を書いたメクリなど……乾さんのお人柄がそのまま文字になったような、きれいな楷書。—もうこの肉筆を見ることは出来ないが、かつて書いて頂き石刻したわが家の表札が乾さんの形見となってしまった。

(大森八四郎)

小笠原義勝さんを偲ぶ

日本国際地図学会の初代の常任委員長であった小笠原義勝さんは、学会の発足後1年半を経ずして、昭和39年4月27日、心筋梗塞のため急逝された。わずか15年の短い間ではあったが、公私ともお世話になった者のひとりとして、小笠原さんの思い出を綴ってみたい。

第二次大戦後の昭和24年秋から27年にかけて、千葉市稲毛の陸軍戦車学校跡にあった地理調査所の構内に、地理委員会という組織が存在した。委員会の任務は、当時一学生であった私にも、占領下の日本の防衛の基礎とするための地誌図を作成することにあると思われた。委員会は、武藤勝彦所長を長とし、渡辺光部長のもとに、アルバイト学生を含めて数十名の職員（大部分が高校出の女子職員）を擁し、地理調査所職員がこれに協力するというものであった。このときの地理調査所職員には、小笠原さん、中野さん、小谷さん、山口さん等が、また委員会は事務長が池田さんで、アルバイト学生には式さん、前島さん、日高さん、鳥居さん等がおられた。

また、地理委員会の東京での拠点としての市ヶ谷分室が、東京地学協会（旧館）の一室を借りて開設され、地理学料のアルバイト学生を募集していると聞いて、2年生であった私は、同僚の伊藤（理）君とともにそこで働くようになった。当時は、2年生になればかなり自由に昼間のアルバイトに出ることができたからである。この市ヶ谷分室での小笠原さんとの出会いが、私のその後の進路を決めることになったのである。市ヶ谷分室は、女性1人のほかは、法政大・駒沢大等の学生や私達から成る6~7人の所帯で、その主な仕事は、建設省道路局企画課が保有する5万分の1の道路現況図と、運輸省港湾局計画課に保管されている大縮尺の港湾施設現況図を移写することであった。小笠原さんは、道路現況図の借出しと返却のために、道路局と分室との間を随時往復しておられた。われわれの仲間は、現況図に表示された道路の管理区分を絵具で、舗装・無舗装、幅員、橋梁の構造・幅・長さ等の注記をペンで地形図に描きうつす作業を行なった。港湾図の方は、直接運輸省港湾局に向いて、港湾ごとに防波堤・航路標識・埠頭・岸壁・倉庫・上屋等の施設の現況を、トレーシングペーパーに透写した。

私は港湾図の方を担当することが多く、そのときは週に3~4日は港湾局計画課に通い、空いている机を借りて作業した。そのうち、課の男女職員と顔なじみになり、3時のおやつを買うためのあみだくじの仲間に入れてもらったりした。後に、私は水路誌を読んで日本の海岸の現況を記述するという仕事もした。こうして市ヶ谷分室で作られた成果は、小笠原さんや、事務局の用務で来室する池田さんによって稲毛の本部に運ばれ、そこで女子職員達によって浄書されたものと思われる。渡辺部長も、上京の折には分室に立ち寄り、われわれを激励したり、冗談をとぼしたりされた。

市ヶ谷分室の上階には、地学協会の広い部屋があり、卓球台が置かれていた。昼休みには、地学協会の女子職員と、もう一つのテナント（窯業協会）の男子職員、それにわれわれとでピンポンを楽しむのを常とした。小笠原さんも、分室に来られた日には必ずこれに参加した。小笠原さんのピンポンは、深く守っていて、何度スマッシュしても山なりの球を返して相手をじらすというタイプで、額に汗を浮かべ、掛け声を発しながら返球を繰り返す姿が、昨日のこのように思い出される。

地理委員会では、「海岸調査」なるものを行っていた。これは、全国の海岸線に沿う幅約4kmの地帯について、4万分の1空中写真の判読と現地調査により、5万分の1地形図上に土地利用現況図と地形分類図を作るものであった。市ヶ谷分室のわれわれにも、一度だけこの調査に参加する機会が与えられ、私は小笠原さんを長とする三陸沿岸の調査に加わった。最初の晩は、気仙沼が大船渡か忘れたが、全員が同じ旅館に泊った。朝目を覚ますと、同じ蚊帳の中で小笠原さんはすでに上半身を起こして、じっと冥想にふけているかのようなようであった。このあとは各自の単独行動となり、私の割当ては北部の種市から種差（八戸市）にかけての海岸段丘地帯であったが、かけだしの私にとっては、種差の宿の人に親切にしてもらったこと、海浜を歩いていて漁師に生がきをもらって食べたこと等が忘れられない。

当時、小笠原さんのお宅は、京王線幡ヶ谷駅から少し南へ入ったところであった。私の下宿が同じ線の上北沢にあったこともあり、時折小笠原さん宅へお邪魔したものである。一粒種の2~3才の女の子

がおり、奥様にも大変よくしていただいたのに、その後疎遠のまま今日に至ったことを、申し訳なく思っている。また、日曜日には、小笠原さんの案内でアメリカ人の若い地理学者が自ら運転して行う現地調査に同乗させてもらい、まだ農村の色濃かった下総台地方面をまわったことも再三であった。

昭和 27 年のはじめ、地理委員会は突如解散になったのであるが、幸いというべきか、その少し前に私は多田先生の紹介で、接收中の新宿伊勢丹ビルにあった米軍の「外国地図室」というところに、学生の身でありながら進駐軍要員として勤め換えしていた。役所の職員採用時期である 4 月が近づいた頃、小笠原さんは「君は今職が安定しているのだから、しばらく待ってくれよ。」といわれた。そして 11 月になって、まず臨時職員として地理調査所に採用され、小笠原課長以下、吉田（稔）さん、乾さん、富沢（章）さん、小谷さん、西村さん等の諸先輩のいた地理課に配属された。

最後になってしまったが、小笠原さんは地理調査所（昭和 35 年から国土地理院）で、昭和 22 年のカスリーン台風による「利根川及び荒川の洪水調査報告」、80 万分の 1 国土実態図シリーズの「労働人口と都市機能図」・「現金収入より見た農業図」等の作成、当時高崎さんがおられた建設省計画局総合計画課との連繋により昭和 28 年から開始された 5 万分の 1 土地利用調査等々、多くの業績を残した。

常に持前の馬力で事に当られた小笠原さんは、50 才の働きざかりで帰らぬ人となってしまった。日本国際地図学会の発足時に建設省計画局にいた私が国土地理院に戻って、1 年に満たないときであった。今にして思えば、日本の地図学界にとって誠に大きな損失であったといわねばならない。

（五條英司）

小川 泉さんの思い出

小川 泉さんは陸地測量部から地理調査所、国土地理院にいたる間、地図調製部門の管理職として在職した。地図技術分野の長老として、園部 薔さん、真塩信次さん、高木菊三郎さんともども本学会の創立以来の参与であった。また、技術士制度制定の初期に、応用理学部門地球物理専攻の中の地図調製を専門とする初めての技術士となった。

筆者と小川さんとの出会いは、筆者が陸地測量部製図科に乾 賢二、塚田建次郎、富澤 章他の面々と共に採用され、第二班配属となって以来である。小川さんは当時将来を嘱望された新鋭の測量手（判任官）で、一年間の見習い修業期間の実技指導教官として、筆者は地図製図について懇切な指導をいただいた。製図科第二班は国内の基本地形図類の編集と製図を行う部署であった。筆者が就職する少し前に定年退職した班長の佐藤武道測量師（高等官）が、地図の理論と技術において傑出されておられたことを、後年先輩達からよく聞かされた。実は小川さんは佐藤さんの女婿でもあった。

筆者が兵役からの継続で陸地測量部教育部生徒の課程を終了し、新任の陸軍技手（戦時中に測量手の名称が統合されていた）として第三課第二班（旧製図科）に復帰したとき、園部さんが班長で、小川さんは班付高等官となっていた。その翌年、毎年恒例で行なう秋の班員職場研修に、小川さんが主任教官となり、前任の技手であった川俣 潔さんと一緒に筆者も助教官の一人に加えられて、上野原へ平板測量実習にいった。

主任級製図作業手である研修員一同が到着する二日前に現地に入り、宿舎になるお寺に挨拶と打ち合せを済ませてから、実習地の裏山へ予察に出かけた。小雨のそば降る冷え冷えした午後、小川さんは自分で平板を据え、周辺の山々の視準方向の点検をいつまでも続けるので、こちらはすっかり待ちくたびれてしまった。何事にも完全無欠に納得ゆくまでやる小川さんの完全主義と頑張りからの結果であった。終戦後、陸軍の解体に伴い陸地測量部は内務省地理調査所、内務省の解体で建設院さらに建設省地理調査所となった。その間に、疎開先の松本郊外から千葉県稲毛（正確には黒砂町）の陸軍戦車学校兵舎跡に職員一同共々移転した。

1950 年代になって、当時駐留していたアメリカ陸軍地図部隊（進駐当初接收されていた新宿伊勢

丹、その後赤羽元兵器廠跡に移転) から、スクライビングの文献、材料、道具一式が当時の所長であった武藤勝彦さんを通じて贈られてきた。地図部では、製図課長となっていた真塩さんとともに筆者も何人かの同僚と同行して、赤羽の部隊にスクライビングの見学に行った。部の企画課長であった小川さんはこの見学には参加されなかったが、大変強い関心を持っておられたようである。その後、オランダの ITC の留学を終えて企画課長となった中野尊正さんから、筆者は地図部の製図作業へスクライビング導入を計る調査研究を命じられた。その頃、印刷部業務課長になっていた小川さんは印刷部内で、独自にスクライビングの遮光塗料、ベースと器具の開発試験研究に着手されており、小川さんの積極的な指導もあり、印刷部の試作研究は着々と成果を収め、スクライブによる地形図の多色分版製図原図を自家製器具と材料によって完成した。その後、筆者の研究係でも印刷部より材料の供与を受け、紙製図について本番の経験を持たない大井京子さんの努力で、20 万分 1 地勢図の編集製図原図の試作に成功した。印刷部の研究では、円筒スクライバーを考案した堤 武正さん、国産スクライブベース、多色校正焼のサーブプリント法それぞれの基礎を開発した渡邊恵一郎さんと田中康夫さんが従事した。地理調査所の方針では、地図部製図課に従来の紙製図の代わりにスクライビングを早急に導入することが要請されていた。しかし、多年にわたり培ってきた紙製図の技術はスクライビングには役立たないのではないかという不安が根づよく製図技術者にあり、基本的に必要なライトテーブルとスクライバーはなく、スクライブベースを米国から輸入する手だてはなかった。しかし稲毛時代の後期になって、製図課で地形図類の製図作業の中にスクライビングがやっと実現した。その頃、印刷部と地図部相互でスクライビング開発について、導入の主導権をめぐって、かなり先鋭化した感情的なわだかまりが生じた。小川さんはその渦中であって、誠実で積極的な人柄がむしろ誤解され、折角の努力について必ずしも正当な評価が得られないようであった。目黒庁舎に移ってから、筆者も関りあって製図課では片江 勲さんが今日のフォタクトスクライブの基礎開発に従事した。小川さんはその後建設大学校測量部長に転出され、まもなく 1961 年に退官された。

国際地図学協会 (ICA) の創立の直接の動機は、欧米先進諸国でスクライビングの急速な開発と普及に触発されて、その技術の交流を目的に 1950 年代後期にストックホルムとシカゴでそれぞれ開催した国際研究集会が大成功したことによると言われている。日本国際地図学会は ICA に日本が加盟するための母体として、秋岡武次郎さん、渡辺 (光) さん、小笠原さん、中野さん、渡辺 (操) さん、川上さんその他の地図学のリーダー、地図協会はじめ関係団体担当者、ならびに関係機関の尽力によって発足した。園部さんは日本測量協会代表者として、発足準備会にも出席され協力された。小川さんは本学会の運営に直接関与される機会がなかった。退官後、小川さんは地図製図を専門とする共栄地図株式会社を創業された。

1986 年 7 月 12 日朝、折から来たバスに飛び乗ろうとして駆けてゆき乗った所で、倒れられたとか、小川さんの訃報がその日のうちに筆者にも知らされた。何事にも精いっぱい当たられた小川さんらしい最期であった。享年 81 才。低い声と息を吸うような調子で控え目に笑う姿が鮮やかに思い出される。

(金澤 敬)

川上喜代四さんのこと

川上さんが昭和 57 年 9 月に、66 才で心不全のため亡くなってから早いもので 10 年になる。川上さんのおつきあいは昭和 20 年の終戦の月からなので随分長かった。一番印象に残っているのは、水路部にはじめて来られたときのこと。それまで海軍教授の身分で、第一線の教育にたずさわって来られた氏が水路部修技所の教官になられた。当時修技所は練馬の開進第一国民学校に疎開しており、私は特修科学生として 2 年間籍をおいていた。終戦間近のある日、海軍防暑服の同氏が学生、生徒を前にして挨拶

拶されたのが今でも昨日のように思い出される。

終戦になり修技所は辻堂に移り、水路部技術官養成所となっても川上さんは引き続き教育に専念され、軍人がいなくなって文官だけの教授陣の先頭に立って当時の所長であった須田水路部長のもとで活躍された。教育とともに全寮制の生徒の食糧問題にも取り組まれ、大変な時代をのりきられた。

昭和 26 年から 37 年までの長い間、氏は六管（広島）、一管（小樽）、七管（門司）そして十管（鹿児島）の各水路部長として第一線の仕事に従事された後、本庁水路部に戻られ、当時の図誌課長として海図、水路誌などの調製に精力を使われ、数々の新しい仕事を手がけられた。

その当時は、地図学会創立の頃で、当初から関心を持たれ、水路部としてその必要性を当時の塚本水路部長に、とくと説明された経緯をよくきいたことがある。折しも後に当学会の初代常任委員長になられた小笠原さんの、ボンで行われた国連主催 100 万分 1 国際図（IMW）国際会議の報告会が国土地理院であった。昭和 37 年 9 月下旬のことである。会のあと学会の設立準備会があって、川上さん、進士さんと私が出席したのが会とのかかわりあいのはじめであった。川上さんは当初から評議員として参加され、水路部職員の中で関心ある人たちには誰かれ問わず学会入会をすすめられた。私も「入らなければだめよ」といわれて入った一人である。

Vol. 1、No. 1 に川上さんと 2 人の名前でも「海図のあらまし」をはじめ寄稿した。30 年も前のことである。その頃水路部の仕事は臨海工業地造成計画に伴う海図の整備という大きなプロジェクトに直面し、この計画に卒先陣頭指揮をとられた。新しい港湾の造成に伴ない第一船の入港に間に合わせるための新しい海図の刊行、その前提となる水路測量、刊行後の up-dating の作業と、寸暇を惜んで努力された。他方、学会の活動には常にその推進力となり、常任委員となつてからは特別の事情のない限り参与に推される 46 年まで、ほとんど役員会には出席され、柔和な面ざしで、それにも増して声は優しくゆっくりと発言され、しかしその内容は、なかなか手きびしいものがあつた。どうしても出席できないときには、前もって私に、「こんどはできたらこの様な意見をいった方がいい」と、いろいろ建設的な助言をされたものである。私たちは川上さんのほか、ときの水路部長の松崎さんのもと、長谷さん、中西さんなどと非常にのびのびと公務の余暇に学会活動ができた。Vol. 2、No. 2 の海図特集の編集のときも、その添付地図についても、随分私の無理をきいて下さった。水路部の見学者も多くなり、籠瀬さんが学生を引卒して来られたときなど、見学終了後会議室で川上さん自ら学生といろいろ話をされた。籠瀬さん、河本さんとおつき合いもその頃からはじまった。その後水路部からの入会者は 50 人を超え、例会、大会などの発表者も多くなった。私たちにとって、今までこのような地図を中心とした、いろいろな方面の人たちの集まりがなかったことと、毎号の「添付地図」は当時としてざん新なものに違いなかったことなど、啓発されるが多かった。

その頃になると、川上さんは測量課長、参事官と進まれ、その間、海洋開発に伴って、海図を航海専用の主題図にしぼり、海の一般図として「海の基本図」の新規刊行計画を策定、その作業をはじめられた。さらに大型新造船「昭洋」の建造、水路部の新庁舎と水路 100 年の記念式、日本水路協会の創立などなど、ちょうどそのような時期にめぐり合われたとはいえ、その責任者であった同氏の努力がなかったならば実現はむずかしかったであろう。この間、国際水路会議や ICAO の国際航空図（WAC）の会議など、数々の会議にも出席されている。

これより前、昭和 44 年、松崎さんのあとを継いで水路部長になられてからは、氏の大きな方針の歯車が回りはじめた。私も幸か不幸か次の年の 4 月、舞鶴の海上保安学校水路科の責任者として、はじめて地方勤務を味わった。その年の 5 月の開校記念日に川上さんは来校され、全学生を前に講演された。

「話すことを考えて原稿を作っておくように」といわれたのを覚えている。毎年のように来られ、水路科の学生との懇談会にも出席され、宮津の実習地にも見えられ、学生と一緒に測量艇に乗られたこともあつた。私が九管（新潟）に勤務していたある時、電話があり、「坂戸さん、こんどの休みにいい？」と。実は東京の留守宅へ帰る予定ですべて段取りをしてあつたのを、本音をいえぬ宮仕え、「はい」と返事をしてしまった。単身赴任の者にとり忘れられない思い出である。それから間もなく川上さ

んは6年間の水路部長を退官され、日本水路協会の理事、日本海洋測量KKの顧問となられ、また地図情報センターおよび東京地学協会の理事、成城大学講師と広い分野で活躍され、その合間には学会の役員はもとより多くの会員とも友好を深められた。渡辺 光さん、野村さん、井上さん、高崎さん、籠瀬さん、大久保さん、山口さん、金澤さん、徳嵩さんなど。今でも高崎さんなどから川上さんのことが話題になることがたびたびある。よほど印象が大きかったのだと思うと嬉しくなる。若い頃からテニス、図誌課長時代から謡曲、そして旅行も好きだった。役所の出張などでは、その調査先の詳細な旅行記ができる程筆まめであった。お酒はほとんど飲まれなかったが興が乗れば「南部牛追い唄」などを見事に歌われた。水路協会へは昭和56年に入院されるまでよく来られた。私もすでに同協会に勤めていたその頃、某社で特集「航海術の変遷」の中で「海図の話」を代りに書いてほしい依頼を受けた。これが川上さんから頼まれた最後の仕事になった。

今、水路関係の学会員は当時にくらべ大分減ってはいるけれど、川上さんの哲学は引き継がれ、佐藤前水路部長、岩渕現水路部長はじめ水路部の多くの職員、水路協会の諸兄、OBの諸兄が熱心に学会のあらゆる面で活躍しておられる。

川上さんはきっと喜んでおられることであろう。ご冥福をお祈りする。

(坂戸直輝)

生野真直先生の思い出

昭和25年5月、私は当時まだ東京文理科大学の学生であったが、アルバイトで教えていたある私立中高等学校の職員室へ、東京都地理教育研究会から、春の総会の案内状がとどいた。社会科主任が、私に行ってごらんになりませんかとすゝめてくれたので、早速参加することにした。まだ、焼け跡がいたるところに残る万世橋近くの交通博物館講堂がその会場であった。暗く陰気な雰囲気であったが、その中で一きわきびと何くれとなく世話をし、指示をしていたのが生野真直さんであった。かねて顔見知りの築浦進さんに紹介していただいたのが、私と生野さんのはじめての出会いであり、それから30年余りの長い交際のはじまりであった。生野さんは当時、学習指導要領の人文地理の委員をされており、総司令部によって停止されてしまった地理教育の再建のために日夜苦心されていたところであった。このご苦心は、後になって、多くの設問によって構成された画期的な人文地理の学習指導要領試案となって示されたのである。

東京都地理教育研究会は、他の教科科目の研究会にさきがけて結成され、いち早く研究活動をはじめていたが、その中心となり推進役を果たしていたのが生野さんだった。

ところが、社会科の中の人文地理は選択科目であったため必修の一般社会や歴史におされ、ともすれば履習生徒が少なく、各高校で悩んでいたところであった。東京都地理教育研究会では、昭和27年秋、小人数ではあったが、雲取山方面へ一泊の巡検をおこなった。また翌昭和28年の夏季休暇に長期の北海道巡検を計画した。当時北海道副知事は生野さんの大分師範時代の恩師である野口常利氏であったが、この巡検に山越えのトラックを用意して下さるなどご援助をいただいたが、これもどのような人間関係でも大事にされた生野さんのおかげであった。この巡検をきっかけとして、その後、夏の巡検が定着し、地理教材の巾を広げることになった。しかし、この計画をし、現地の知人に交渉し、見学地を選定し、交通機関をきめるなど、まだ交通不便で、旅行業者がヨチヨチ歩き時代に、業者顔負けの活躍をされていたのは印象深い。

また、地理教育研究会も、各地で動きはじめ、高校における人文地理の必修化運動が広がっていった。そして、昭和31年全国地理教育研究会連合会として組織され(松木 茂会長のちに二代目生野会長)社会科教育全国連盟からとび出した形で動き出したのも、地理が先陣を切った。やがて地理が必修ということになる。

この中における生野さんの活躍はまことにめざましいものがあった。

こうして地理が必修になったが、この必修が、地理学習の中における地図学習の重要性に火をつけることになった。

生野さんは田中啓爾先生のご指導で日本書院の地理教科書・地図帳の製作をされていたが、詳細な本として採択も多く、全国的な影響も大きかった。このころ日本写真新聞社のもため「地形図の読み方と作業」を編集することになった。この本の特色は五万分一地形図に着色などの作業をすることにより、地図の持つ意義を鮮明に示すためページごとに作業の方法を指示し、設問をつけたことである。学習指導要領委員として多くの設問を考えてこられた生野さんの経験が、具体的に地形図を通して生きたわけである。明治のはじめの問答が復活した形となったが、この設問が全国の地理教師の共感を得て、忽ちベストセラーとなった。私達としてはこれが五万分一地形図の普及に大きな力となったことを感じている。

日本国際地図学会が発足したのもこの頃のことである。生野さんは早速学会に参加され、準備の段階から会則の起案作りにたずさわり、また常任委員として運営に盡され、特に学校教育の現場で地図を利用する立場からの発想が貴重な推進役となった。

私も生野さんのおすゝめで学会に参加するようになり、地図に対する知識と理解が一層深められた。生野さんは一教師としてだけでなく、学校経営にも力を注がれ、教頭、校長（江東商業・桜町高）となられたが、管理職となられたあとも、学会活動に積極的に尽力されており、これは並大抵のご努力ではなかったと思う。

生野さんのブルドーザーの如き行動力と先見の明が発揮されたのは海外旅行の推進であろう。昭和40年海外旅行が自由化されると、早速全国地理教育研究会の会員によびかけてヨーロッパ巡検を実施した。日新航空と組んでチャーター便を用意し、一機貸切りで飛んだ。何しろこのような計画ははじめてのことであり、どこも考えていないことを、率先して行う行動力は素晴らしいものであった。後に「ヨーロッパバスの旅」として日本書院からその見聞記を発行したが、当時こうした旅の記録の出版が乏しい中で干天の慈雨として現場教師に珍重された。また、旅行中立寄った西ドイツのロマンティック街道のロツテンブルグでは、日本人の教師130人が見学に立寄ったというので新聞記事になった。先年久し振りにロツテンブルグを通ったが町中に日本人があふれている様子に、今昔の感を深くし、生野さんを偲んだことであった。

生野さんのことで忘れてならないのは、地理教材を具体化する一つとしての写真であろう。巡検のたびごとに三つも四つもカメラをぶらさげ、白黒写真、カラー写真、スライド、大型カメラとつかいわけていた。

度重なる海外旅行の記録では貴重な頁をかざり、市販のスライドの出版のもとゝなっていたし、自作スライドコンクールでは文部大臣賞を受賞されたのであった。校長退職後も地理研究所を設立しこれらの仕事を続けておられた。

生野さんは行動の人である。この憂き世を疾風の如くかけ抜けていってしまった。諸行無常の風も包みこんであの世へ巡検に行ってしまうように思う。私はご縁があつて生野さんの近くで地理研究会の仕事を手伝わせていただいたがため、最後に弔詞を述べさせていただくことになったが、その中で「今、先生は極楽浄土をめざし、黄泉の旅に出発されたことでしょう。白装束わらじばきでも、あいかわらず沢山のカメラをぶらさげて、三途の川のスナップ写真をとられていらっしゃることでしよう」と述べたが、さて生野さんの極楽ダヨリ写真展の開催されるのを待ち望んでいるのは私だけではないであろう。極楽の視聴覚博士としてご活躍あらんことを祈るや切である。日本国際地図学会から依頼された生野さんのプロフィールとしてはやゝ外れているようにも思うが、地理と地図との織りなす中で、私として思い出を記し、ご依頼に応えたつもりであり、ご寛恕いただきたいと思う。

（品田 毅）

高木菊三郎氏のプロフィール

高木さんが亡くなられてから大分年月が経ったので記憶もうすれ勝ちであるけれど、思い出の糸をたぐって筆を進めて見た。

氏の著作になる昭和6年発行の「日本地図測量小史」を読み、また氏が地図に対して科学的な研究態度で接して居られることを聞き、痛く感激して小石川の初音町にあったお宅に毎年正月に訪ねするようになった。ふだんは陸地測量部の構内でお会いにはできたが、勤務中とのことで簡単な会話を交す程度であった。正月にお宅を訪問すると、時々中国風の羽根の扇を、さわやかに使っておられて、仙人のような感じであった。

地図の話になると部厚い原稿の束を幾つか持って来られて、熱心に話をして下さり、いつ盡きるか判らない程だった。そこであまり長居をしては失礼と思い帰ることにしていた。ある日高木さんは「あなたもふだん気が付いたことを、どんどん書きためておくとよい」と言われたのが今でも思い出される。けれども不勉強な私にはなかなかそうはできなかった。悔まれてならない。

あるとき、高木さんから「そのうちに、秋岡武次郎先生のお宅に一緒に行きましょう」と誘いがあったが、これは実現しなかった。

戦時中、陸地測量部で部内限の機関誌「地図」と題する冊子を出していた。奇しくも現在の地図学会の「地図」と同じ名称がつけられていた。この冊子は昭和18年1月号が創刊号で、僅かの間しか続いていなかった。B5判、約60ページのもので高木さんは、これによく寄稿されていた。地図の注記文字のことや、地図閑談といった内容のものだった。いくつかその表題を拾ってみよう。

昭和18年2月、3月号：ビルマと其の地名

同年4月、5月号：地図の注記としての明朝体文字に就て

同年6月号：「アトラス」の起源及びその概況に就て

同年9月、11月号：地図学談義

とにかくよく書いておられる。

昭和18年8月出版された「地形図学概論」の巻頭に著者の略歴が紹介されている。

著者略歴

東京都人。明治39年陸地測量部に職を奉じ、大正10年任官、地図製作に主任たること多年。

現在研究部に勤務中である。この間大正3年には大正天皇御即位記念三府図式案懸賞に応募して一等に当選、大正10年11月には家蔵資料を出陳、陸地測量部に於て地図発達史展覧会を開催した。

篤学の成果積んで山をなし、「地形図学概論」を始め、陸続上梓の予定である（山一書房）。（以上原文のまま。）

私が陸地測量部に入部したのが大正14年であったからこの展覧会は残念ながら見ていない。

高木菊三郎氏で忘れられないのは、東北大学から理学博士号を得られたことである。それは戦後になってからであった。

同じく戦後、氏が千葉市小仲台に居られた頃、登山用図を数種類発行されて居る。当時の地理調査所の地形図に基づいて集成したものであった。私は古書即売展で2、3枚を手に入れたが、谷川岳、槍穂高の登山用図で氏の学究肌を感じさせられる逸品であった。製図者は安井某としてあった。高木さんは、日本山岳会の古くからの会員で、昭和41年名誉会員に推されていた。

いつも和服姿でひょうひょうとして居られ、いわば「草食動物」のような方であった。「肉食性」の強い人達からは随分とこき降ろされて悪くいわれた。

また、高木さんが独学でロシア語、中国語、蒙古語等を勉強された。それは会話のためではなく、地図の判読に役立たせるためのものであった。

日本国際地図学会には創立当初から入会され名簿第1版には会員ナンバー1026とある。普通会員は1001番からなので、随分早く入会されたようだ。そして参与として終生活躍されていた。いろいろの

会合にはいつも出席され、とくに地図用語専門部会には、よく出席されて帰りは一緒であった。地図の話をしながら楽しかった。

その後、病に臥され平塚市の病院に入院されたのを、関口正雄さんからの連絡で知り、シクラメンの花を持って見舞に行った。病室には娘さんが一人付添って居られた。氏は、うとうと眠っている様子だったが目を覚ましたとき、娘さんが缶詰の桃を口に入れてあげていたのが目に焼きついている。私に気が付くと、「小杉さん、今度はもう駄目ですよ」と言われた。これが高木菊三郎氏との永の別れになった。

武田満子さんによると、高木さんの晩年、総武線の中で会ったとき、羽織袴でつり革につかまって古文書を読んでおられた姿が忘れられないとか。私にもそのときの氏の容姿が手にとるようにわかる。

その後、読売新聞に氏の業績が詳しく掲載されていたのを覚えている。

明治 21 年 10 月 27 日生、東京都、大正 10 年陸地測量手に任官、昭和 18 年陸軍技師、昭和 32 年建設研修所講師。昭和 36 年山岳功労者として厚生大臣より感謝状、昭和 41 年日本山岳会名誉会員。昭和 42 年 2 月 8 日平塚市の病院にて逝去。行年 78 才。

(小杉金三郎)

野村さんの思い出

野村さんとは、カナダのオタワ、スペインのマドリド、そして最後になってしまったオーストラリアのパスなど、ICA 会議で御一緒した海外での思い出が多い。あのやや小柄ではあったががっしりした身体、部厚い近眼鏡、簡明流暢な英語、そして少し前かがみに歩く姿など、昨日のことに脳裏をよぎってゆく。

1972 年、モンリオールとオタワで行われた第 4 回 ICA 総会には、当時私が国土地理院の地図部長をしていたこともあって日本代表を務め、野村さんに ICA 副会長に当選してもらうべく努力した。

その頃 ICA の事務総長だった F. J. オルメリンクをロビーでつかまえ、総会での野村支持を頼んだ。野村さんは、大真面目な顔で「俺は日本の地図学会から、ICA 副会長候補として推薦されてきた。もし落選するとこのまま日本には帰れない。日本人には腹切りという作法があるのだ」といって、オルメリンクをびっくりさせた。オルメリンクもなかなかユーモアを解する男で、おどけた表情で私の肩をたたき、「本当か？」という。もちろん私も「ドクター野村には武士の血が流れている。本当に切腹するかも知れない」と真顔で答える。

オルメリンクも、大げさに驚きのゼスチャーをしながらうなづく一幕もあった。

投票の行われる前夜のオフィシャルバンケットでは、各国代表が何か歌うことになったが、音痴の私は、その前日、野村さんが歌詩まで書いて特訓してくれたテネシーワルツがどうしても歌えず、わが故郷の悲しい恋の歌だと前置きして、「船頭小唄」を歌った。東洋の妙なメロディに満場静まりかえってしまったが、私は野村さんに壇上にきてもらい、日本の ICA 副会長候補であることを紹介し、歌詩を英訳してもらった。「枯れすすき」などの英訳には、さすがの野村さんも困惑し、河原の晩秋とか、うまい意識で切り抜けてくれ、満場の拍手を浴びた。

翌日の総会では、野村さんは満票に近い得票で当選した。これから 8 年後の ICA 東京会議まで、新会長に選ばれたウィスコンシン大学のロビンソン教授が野村さんの米国留学時の恩師であったこともあり、また引き続き事務総長を務めたオルメリンクがすっかり知日派になってくれたこともあって、野村さんは、日本の地図学の国際化のため大きな足跡を残された。

1974 年の ICA マドリド会議の折には、当時ヨーロッパに研修出張中だった金窪敏知君のホテルに私も同宿させてもらっていた。この時、金窪君がフランスの友人から贈られたというっておきの自家製のブランデーを一本持参してきていた。会期中のある晩、野村さんをお呼びして、これを賞味したが、このブランデーは本当に旨かった。さして夜もふけぬうちに、あきれ顔の金窪君を横目でみ

ながら、野村さんと二人できれいに空にしてしまったことを覚えている。帰国してからも、あのプランデーは旨かったと、時折野村さんと話し合った。

野村さんに乞われるまま、坂戸さんの後をうけて、1985年ごろから数年間、横浜国大教育学部で、地図学の講義をしたことがある。

当時野村さんは、教育学部の教室を離れて、事務管理棟の4階からの学長室におられた。折からの学生運動はやや沈静化に向いつつあった時期だが、学長室に入るには、庶務を通じて許可を得、エレベータの操作にも若干の手続きを要したが、間もなく野村さんは私が自由に出入りできるよう手配してくれた。

野村さんにさそわれるまま、三度に一度は、午後の講義のあと、学長室にゆき、雑談のあと、学長の車に横浜駅まで同乗させてもらった。二、三度は横浜駅ではなく関内近くまで車を走らせ、野村さんのなじみの店で、お酒を飲んだ。

新しいアトラスの企画のこと、学会の運営のことなども話し合ったが、仁川時代の話や学長として務めの話もきいた。苦勞の多かった若き日の思い出話も、少数派の学部から選ばれ、かつ学生運動に対処された学長としての気苦勞の多い毎日の話も、決して愚痴にはならず、酔っても話に抑制がきいていて、気持のいいお酒だった。

野村さんとの最後の会合は、地図センターの一隅で行われた学会の企画委員会であり、熱のこもった会議が8時すぎまで続いた。途中まで一緒に帰りながら「野村さん、一献」といいかけたが、お宅も遠いし、明後日から教え子たちに呼ばれて、御夫妻で新潟方面に講演旅行にゆかれるということなので、そのままお別れした。そして、野村さんはこの旅先で倒れ、不帰の客となられてしまった。

野村さんが、ようやく二期にわたった学長職から解放された直後のことで「これからは好きな地図を楽しんで……」と、少しつかれてはいたが、ほっとしたような顔で話されていたのを思い出す。そして、「もっと早く学会会長の職も君に譲っておくべきだった。」とも言われ、私が「いや学会のリードは、もうしばらくお願いしますよ。雑用は私たちがやりますから。」という、何の制約もない立場が欲しいのだというようなことを、ぽつりと語っておられたことも覚えている。

あれから早くも7年がすぎた。私も、当時の野村さんの年齢に近づいてきて、野村さんのあの頃の気持がよく分かるようになってきた。

野村さんは今天国で何をしておられるだろうか。それこそ好きな地図を広げて、忙しすぎた現世を見下しておられるかも知れない。あるいは、同じ飲み仲間だった渡辺 光さん、山口恵一郎さん、あるいは乾 賢二さんなどと賑やかに談笑されておられるかも知れない。

改めて、御冥福をお祈りする次第である。

(高崎正義)

山口恵一郎さんのお人柄

山口さんはいつどこで見ても若々しく、そしてスマートで、なかなかの美男子だった。地図学会と、私どもの仕事の二つの会合で一、二か月に1回程度は会い続けており、それにお若い頃から知っているので、70才にもなっていたとは私にはとても思えない。なにしろ髪は青年のように黒く豊か、顔も体も太り過ぎずすっきりしたままだったから。ずいぶんもてるだろうと水を向けても、その言葉にのらないが、やっきになって否定するような人ではなく、春風駘蕩の風情を崩さなかった。男たちからも親しまれ敬愛されていた。

この人はりきんだり、人を押しつけたり、争ったりはしないタイプ。少なくとも私はそういうところを見たことがない。山口さんは感じのいい穏やかなお人から。それでいて長くつき合ってみるとずしりとした貫禄のにじみ出る人だった。天賦の才能と永年つちかった広くて深い学識が泉と湧き続けたため

だったろう。深い学識はわれわれ身近かな者だけでなく、広く全国的に知られていて、例えば富山大学から集中講義を頼まれるなど、そうした世界からも高い評価を受けるような優れたものを包み持っていた。以下二、三の面、特に私も加わったある出版社の仕事を、山口さんのお人柄を中心に回想してみたい。

いまから13年前、北大教授の堀 淳一さんと3名で、「地図の風景」という20巻ものをつくることになった。出版社は「KK そしえて」といい、社長は山口さんとは旧知の中、堀さんは学部は違うが北大の先輩。初顔は大谷社長と私の間だけ。それでも2冊目が出た頃は4名集まるのが和気あいの楽しみにまでなった。

ところでわが地図学会では創立以来、毎年の総会・学術発表会には外書の輸入販売で知られる内外交易 KK、古今書院・大明堂その他の著名出版社が、広いスペースを確保して地図・地理書を展示するだけでなく、特別割引までして学会員に廉価販売するなど親密さが30年続いてきた。公私の作製機関によるすぐれた地図類、作製機器も見学・購入の便が続いている。KK そしえての、堀・山口・私の編著である前記「地図の風景」は年を追って巻を加え、その後の新企画の別書ともども会場の一角を占めて久しい。「地図の風景」の編集・執筆を通して、それまで感じていた山口さんらしい面と、予想と少し違った面の二つを知らされた。いまにして思うと両面を合わせたのがまことの間人像だったことになる。そうした側面を拾い上げてみると、山口さんは自ら率先して、あるいはがむしゃらに仕事をしよこまない人であった。たとえば「地図の風景」20巻は各巻40程度の独立した小地域や地点から構成されていて、建て前は3名でそういう項目を持ち寄り、協議したあと、執筆分担を決定したことになる。実情を明かせば堀さんの発想でことは円満かつ能率的に進められ、堀さんが最も多くの項目を引受け、山口さんが残りをしよこ込まされる。なまけたい私はなるべく少なくしてもらったが、各地の著名人へ外注に出すことも提案した。原稿の仕上げは堀さんが早く、山口さんにはときには大谷社長から巧みに催促されていた。各巻のはしがきの約三分の一は山口さんも書かされたが、いずれも山口さんらしい文体である。たとえば地図の風景っていったい何だろう。などと他人ごとのようにしゃあしゃあと書く。これは一見無責任のようだが、本音は一種のてれであり、山口さんは地図技術者でありながら作家なのである。原稿が遅れるとホテルへかみずめにされたりしたが、これも作家にふさわしい。事務屋にも見えるが、通り一ぺんの事務屋ではなく、内なる自分を掘り起こした人、地図界にも盡されて知人も多かった大谷さんは去る10月18日逝去された。

これまで語られていない場所での一側面をとの執筆要請にのり過ぎて横道へそれたようだ。ここで地図学会員周知の山口さんを私なりになぞるといことになるだろうか。山口さんが創立以来30年近く評議員であるのは別に驚くに値しないが、同じ期間激務を伴う編集委員長を続けた、あるいは続けさせられていたという事実は見逃せない。いつの間にかポストを失って久しい私如きから見ると大したことと感動する。本人がそれを好むことはもちろんだが、学会の皆さんが山口さんに熱い期待を寄せ続けていなくては実現されない偉業といわざるを得ない。このさい同様のご労苦を長年こなして下さっている同志の方々にも地図学会員であるわれわれは改めて感謝しなくてはなるまい。初めの所でポストや仕事へがむしゃらに手をのばさない人のように山口さんを定義づけはしたが、結果からみると山口さんの双肩に仕事やポストが寄りかかっていた。それは誰の目にも山口さんのわざや才能が見えるからだ。

山口さんの双肩への期待、頭や手への正当な評価は豊かな抱擁力や鋭い眼力に恵まれない、心の狭い人からは得られない。評価がそがれる場合がときに起こる一要因は、山口さん側にもあるといえなくもない。地図一般はもとより、地名のこと、言語のこと、旅の話、地理のことから文学まで解るために、やることが多く、広いための大きな誤解のせいである。しかしもっと大きな要因は読者側にもある。例えばかつて渡辺 光先生とで成し遂げた日本列島の地形区分図にしても、地図への理解力に加えて山口さんの地形理解力を知らないためである。そして山口さんを知っている人でもその力量を誤解し勝ちなのは先入観のせいである。山口さんを著名な地名研究家だと知悉しない人もあろう。何冊もの著書があるらしいぐらいで片付ける中途はんばな人だと、山口さんの地名の本も中身はどれも大同小異だと誤解

し勝ち。つい昨今アイヌ地名を調べて図書館で時間をつぶしたが、結果からいって山口さんの本が一番参考になった。そうした誤解・正解のトータルとして山口さんは地名の学会の、但し少しも威張らない長に、それも周囲から押されてなった。山口さんの好みはそれと正反対だが、もっとアカデミックで、ちっとはペダンチックな外観を見せていたら、つまり文学的な本質を形だけでも隠蔽していたら、世の愚昧を感心させて一生が送れたことだろう。山口さんへこういう駄文でなく、よりアカデミックで組織的体系的な人物評がどしどし書かれ、語られることで、裏から表から、近くから遠くから眺め直されて、妥当な完全像にと昇華してゆくことであろう。そうなることを深く願うものである。しかしシャイであるとともに、内面的に自信の強い山口さん自身はあの世で、どうもねえ、と微苦笑をするような気がする。

(籠瀬良明)

「ギャーさん」こと渡辺 光さんを想う

ギャーさんという名前は関西の地理学教室の一学生であった筆者でも知っていた。

ギャーさんは、全国の大学の地理学教室から学生を公募して、地理調査所のスタッフにする、という構想をもっていたらしい。筆者はこの構想にひかれて、地理調査所の臨時職員となった。この構想の予算は防衛庁予算であった。その翌年、これもギャーさん達の構想で実現した国家公務員上級職の地理職試験に合格して、地理調査所の正式職員に採用された。しかしギャーさんは数年後にはお茶の水大学教授に転出したから、直接に接した時間は僅かであった。それでも殆んど毎日顔を合わせたし、強烈な個性と行動は今でも頭の中に残っている。

ギャーさんの能力がもっともよく発揮され、得意満面であったのは「地理委員会」の創設とその管理運営にあったであろう。この委員会はギャーさんの提案によるものではなかった。アメリカ留学時代の恩師であるミシガン大学 R. B. ホール教授の意向と連合軍総司令部の指令に直接もとづくものであった。敗戦直後の混乱と食糧難の時代に、全国の地理学研究者が何をやっていたかは定かではない。ギャーさんは連合軍総司令部をうまく利用して、全国の地理学研究者に直接連絡し、交渉することによって多数の地理学者を動員する体制をつくることに成功した。研究者には幾ばくかの調査研究費が配分され、日本各地域の地形や土地利用が調査された。一方、地理調査所のあった千葉の優秀な女子高卒業生数十人を採用し、地理委員会所属の地理学研究者の指導のもとに、全国から寄せられた情報を収集整理し、それを地図に編集していった。

筆者が地理調査所に入った時は、既に地理委員会は解散していた。しかしその当時のスタッフの多くは残っていて、雰囲気も当時のまゝであった様である。使っていた建物も地理委員会のまゝであった。その建物は「別館」という木造平屋建で、地理調査所のオンボロ庁舎の中では独立した、あかぬけた建物として異彩を放っていた。

ギャーさんは突如として別館にやって来た。いさゝかかみ合わせの悪い入れ歯をかみながら部屋の真中で少しそり身になり、やゝかん高い声で演説を始める始末である。筆者や幾人かの同僚の席に立ちより、上からかぶさる様にのぞき込んで近況を聞き、時には関西の地理学者の動向をさり気なく聞き出すような風情があった。

ギャーさんは職員を集めて、研究会のようなものを主宰した。自らもたびたび講義をした。時には試験もやり、大卒の方が女子高卒より成績が悪いと吹聴した。

ギャーさんは自らの講義の時よく云ったものだ。早くから地形学者とか人文地理学者などと専門に分化するのはわが国の通弊である。地形のわかる人文地理学者、歴史の判る地形学者であるべきである。筆者もこれに同調して、地誌の強いフランスでは地形の学位論文には人文関係の副学位論文が要求される、などと云ったことを覚えている。

ギャーさんの講義は、日本の地形区、北海道の開拓、日本の土地利用、地理と地図というように多

彩であった。単なる地形学者ではなく、歴史や人文もよくわかる自然地理学者でなければこんな講義は出来なかったであろう。地図づくりには、測地、測図、製図、印刷それに地理と、何れも欠けてはならないと強調した。

測地が強大であった当時の地理調査所の現状を憂える節もあった。ギヤーさんはまた、地理調査所を地理・地図の大学院にしようと考えていたのかもしれない。それほどこの研究会のようなものに熱心であった。ある意味では地理アカデミズムの研究者、あるいは地理調査所の地図部長として地図行政管理者というより、地理の教育者という方がより相応しかつたかもしれない。ギヤーさんが研究会の主宰をやめると、研究会活動も下火となり、自ら非常勤の教授を勤める大学院に行くよう幾人かの職員にすゝめるようになった。その執拗な熱心さに耐えかねて、筆者も一時期、その大学院に在学したことがある程である。

ギヤーさんの存在は筆者にとっては大きかった。しかし日本国際地図学会とギヤーさんと筆者との関係でみると、途端に印象がうすくなる。

ギヤーさんが初代の日本国際地図学会会長になってもおかしくはなかった。日本国際地図学会の成立の経緯から、国土地理院の比重は極めて大きくて、5期10年の間、国土地理院の長が会長を勤めるという発展途上国型であったのは仕方のないことであった。しかし国土地理院関係者以外では、ギヤーさんは始めて会長となり、1973年から1980年までの4期8年間在任した。筆者は1964年から科学技術庁に移り4期8年つとめた常任委員を1972年にやめているのでギヤーさんと接する機会は殆んどなかった。従って会長としてどのような抱負をもち、具体的にどう会を運営したかは余りよくわからない。

筆者は1962年頃から日本国際地図学会の設立に参画した。学会設立のため、学会、政府機関、業界など各方面の人々に「トンちゃん」こと小笠原義勝国土地理院測図部長と日参した。七管水路部の川上喜代四さんとも電話で何回も打ち合わせをしたものである。こと学会に関しては、わずか3年足らずではあったが、トンちゃんとは連日会い、密に連絡しあい、もっとも思い出が深い。

1958年頃から、わが国の地図界を代表する学会を設立しようという機運はあった。ギヤーさんを要として国土地理院の地理関係者が中心になって動いていた。

日本国際地図学会を作ろうとしたとき、測地関係者から働きかけてきたのは、測地学会の枠の中で活動してはどうか、特別な予算をもつ地図学特別部会を作ってもよいというのであった。トンちゃん達はそれでも実に頑張った。こんな時、剛球投手のギヤーさんで踏張り通せたかどうか。科学技術庁に移り、学会事務局を辞める挨拶をトンちゃんにしたとき、そうか、科技庁に行くんだね、とさびしそうに答えた。1年後にトンちゃんは亡くなった。

(河本哲三)